

今こそ読む この1冊

潮木守一

名古屋大学・桜美林大学名誉教授

渡辺秀樹・金 鉉哲・松田茂樹・竹ノ下弘久 編

『勉強と居場所—学校と家庭の日韓比較』

(2013年 勁草書房)

日韓の受験競争を多角的に比較

タイトルがややそっけないが、中身は日本と韓国の比較研究である。日本と韓国は一頃受験競争の厳しさで世界中の注目を集めた。なぜ受験競争が厳しくなるのかを巡って、様々な説が登場した。ある人々は、それは遅れて近代化に参加した国に共通する特徴だとして、それを「後発効果」と名付けた。またある人々は短期間に急速に近代化が進行した点に着目して「圧縮された近代化」の結果だと主張した。さらには当然のことながら儒教文化の影響に着目する説が登場したが、ただしこれも一枚岩ではなかった。同じ儒教文化に着目しても、勉学で優れた結果をあげることを高く評価する家庭環境、社会一般の雰囲気に着目して、それが厳しい受験競争をもたらしたのだとする説がでたり、さらには一族の名誉を高めるといった家族主義的な価値観が子ども達の間で厳しい受験競争をもたらした原因だとする説など、いくつかのバリエーションがあった。さらには欧米の研究者からは、日韓とも食事に箸を使うことに注目して「チョップ・スティック効果(箸文化の効果)」という説まで飛び出したが、これは半ば冗談の部分が多かった。まさに一頃世界中の人々が自由奔放に仮説を提示した。

さらには各種の世界学力調査の結果が報告されるような時代が到来すると、中国、韓国、日本といったアジアの国々が上位を占める結果が明らかとなってきた。そのたびにどうしてこれだけアジアは学力面で強いのが話題となった。さらにはアメリカ西部のように、多くのアジア系住民が多く住んでいる地域では、同じ学区のなかで比較しても、たいていアジア系住民の子ども達の成績が上位にくるのは「なぜか」が話題となった。



問題は日本のインセンティブ・ディバイド

ここで取り上げる報告書は、慶應義塾大学が韓国青少年研究所と7年間にわたって行った共同研究の結果である。この共同研究には日韓両国の研究者が参加して、実際はどうなっているのか、多角的な調査を行った結果が報告されている。なかでも注目されているのが、学校の仕組み、親子関係の在り方、学業成績に対する親の関心度の高低である。例えば、韓国では既に1970年代の初期に高校格差縮小のため、通学区制を定め、内申書と抽選で進学する高校を決める改革が行われた結果、激甚な高校受験競争は緩和されたが、そのかわり大学入学時点での競争が激化した経験を持っている。さらにはブランド大学への進学傾向が強まるにつれて、今では韓国国内の大学にとどまらず、最近では海外の大学に進学する「脱韓国現象」が強まりつつあるという。大学卒業者の増加のなかで、さらなる差異化を図るとしたら、国外のより高いブランド大学卒業の資格をとることが必要となるのであろう。

この研究ではこの「なぜか」という疑問に、質問紙調査、インタビューなど様々な実証研究の手法で迫ろうとしているが、なかなかすっきりした答えはみつからないらしい。ただ日本ではあきらめる子どもは早いうちからあきらめ、その結果「インセンティブ・ディバイド」(=やる気の格差固定)が起きつつある点が一頃話題となったが、韓国ではそうではないという注目すべき事実を発見している。これは日本にとっては、大きな反省材料になる点であろう。ただ考えてみれば、人間の発達や成長といった現象は複雑で、そう単純に答えを見つけることは難しい。日韓両国にまたがる研究チームを編成し、これだけの規模の共同研究を実施した慶應義塾大学には大いに敬意を表すべきであろう。